

「紅花絵巻」を読む

東北芸術工科大学東北文化研究センター 菊地和博

はじめに

最上川舟運の流通品目の筆頭にあげられるのが青苧と紅花であり、江戸時代の出羽山形の特産品として名をなした。昨年度、本研究誌においては青苧を取りあげたのに続いて、本年度は紅花について焦点を当てることにする。

ところで、紅花の作業工程を題材にした絵画資料は山形県内に三点残されている。一つは、狩野派絵師青山永耕筆の「紅花屏風」（六曲一双）である。青山は現山形県東根市六田出身であり、文化一四年（一八一七）から明治十二年（一八七九）年の間に活躍した画家である。本屏風は幕末頃に描いたものと考えられている。

もう一つは、京都四条派絵師横山華山筆の「紅花屏風」である。この屏風は、前半双が文政六年（一八二三）の武蔵国（埼玉県）、後半双は文政八年の奥（一八二五）州大河原金ヶ瀬（仙台市）を描いている。

さらにもう一つあげられる。作者不明の「紅花絵巻」である。描かれたのは江戸時代であろうが、来歴も不詳であり絵画技法的にも高い水準とはいえない。個人蔵であり普段は人の目にも触れない。ゆえにこれまでは本格的考察の対象からはずされてきたきらいがある。

そこで、本稿ではあえて「紅花絵巻」を考察の対象として選び、紅花づくりの作業工程を他の二つの紅花屏風と比較しつつ検証してみた。あわせて、そこに描かれる人々の生身の姿、農村生活の一断面がどのように描かれているかを述べたものである。

一、「紅花絵巻」とは

「紅花絵巻」は、東根市神町地区在住の武田陽氏が所蔵するものである。武田家は江戸初期から代々半十郎を名乗る名家である。弘化四年（一八四七）生まれで八代目にあたる半十郎は、明治後半から大正初期まで東根町長を務めている。九代目が武田重郎、そして十代目が現在当主である陽氏である。「紅花絵巻」がどういう経路で武田家に伝わったのか不明であるが、稲作作業を描いた「村山農耕絵巻」も武田家に伝わっており、ほぼ時を同じくして作られたのかもしれない。

「紅花絵巻」は、ふとしたきっかけから昭和三年以降に知られるようになった。長さ七四〇cm、幅三五、四cmの小型の巻物である。落款もなく作者や年代はまったく不明である。描いたのは先に記した「紅花屏風」の作者青山永耕ではないかとの説がある。しかし、筆使いは必ずしもきめ細かいものではなく、作風の違いは誰の目にも明らかである。「紅花屏風」の下書きではないかとする見方もあるようだが、図柄が決定的に異なる。

真偽のほどはともかく、当絵巻は江戸時代後半に出羽国村山郡あたりの紅花栽培地を舞台にして描かれたと思われる。紅花はどのようにして加工され商品化されたか、おおよその作業工程が知られる貴重な絵画資料であることは間違いない。

二、紅花商品化への作業工程

「紅花絵巻」は、紅花が出羽山形において栽培され、製品として出荷されるまで農家の庭先で行われた作業工程を描いたものである。以下、作業場面を順を追って考察し、そこに何が描かれているのか、作業にともなう人々の動きを丹念に追っていきたい。

①「畑起こし」

鍬を使って紅花の種を蒔く畑の耕地を行っている。六人の男性が作業に従事しているが、手を休め畦道で煙草を吸って一服している者もいる。畑仕事を手前で眺めながら赤子に母乳を与える女性と、木に登って遊ぶ二人の子どもが描かれている。一般的な農作業風景ではあるが、戯れる子どもたち、笑みを浮かべて母乳を与える母親、畑仕事に精を出す男たちなどを描き、平凡ながら平和な農村のくらしぶりを春の始まりの農作業の中で伝えようとしている。

なお、使用されている鍬は、木製の鍬にU字型の鉄の鍬先をはめた風呂鍬で、鉄鍬が一般農民に普及するのは明治時代以降である。



② 「種まき」

夫婦であろうか、女性が籠をもって種を蒔き、その後を男性が鍬を持って種の上に土を被せる作業をしている。紅花の種まきは、腰をかかめて指先に種を数個つかんで土に浅く埋め込むようにして植えていく。しかし、絵巻では高い位置から種をバラ蒔いているふうである。かつてはそのような蒔き方が一般的だったのか。そうだとすれば、種が散ってどうしても間引きが必要になる。種まきは、現在は四月末頃に行っている。



③ 「草取り・間引き」

生えてくる雑草や余分な紅花を除去する間引きの作業を行なっている場面と思われる。三人の男性が紅花畑に入って腰をかかめて手作業をしている。畦道から老婆がふにやら声をかけているふうで、畑から一人が顔を上げて応じようとしているかのような細やかな描写もある。その上の畑でも、三人が同じような作業をしている場面が小さく描かれている。



④ 「花摘み」

畑に入って一つ一つの紅花の花弁を手で摘み取っていく光景が描かれている。絵巻では男女十人が花摘みに従事している。キセルをくわえた男性が描かれているが、このことについて後ほど触れる。遠くの畑でも九人が花摘みに懸命な様子である。収穫時の生産農民の満ち足りた空気が伝わってくるような場面であり、生き生きと描かれている。

この作業は紅花の茎や葉に出ている刺が指に刺さり痛くて大変なので、できるだけ朝露に濡れて刺が柔らかい早朝に摘み取らなければならない。畑の中の全員が手甲をつけて手と腕を守っている。

紅花は朝露の多い中山地方の最上川沿いの畑地が良いといわれている。しかし、実際は紅花の収穫時に最上川の川霧発生率は少ないという(注1)。したがって、大切なのは朝露だと考えられている。花摘みは現在では七月中旬頃がピークである。



⑤「花洗い」

摘み取った花卉を籠に入れて、川の水で雑物を取り除きながら花をきれいに洗う作業である。男性二人が裾をまくしてて川の中に入り、籠を持って花洗いに懸命である。一人は褌が見えるほど着物を腰まで上げている。当時外見はあまりおかまいなしということだろうか。

その脇では、キセルを右手に持った年配ふうの人物がいて、同じように裾をまくって川に入っている。しかし仕事に従事しているわけでもない。まわりで働く人達を指導・監督する役目の人なのだろう。

よく見ると、川に近い木の枝に提灯が吊り下げられている。これは、その日のうちに急いで花卉を洗う必要があるから、薄暗くなっても仕事できるように掛けてあったものと思われる。盛りのときは真夜中の作業もしばしばあったと記録されている(注2)。提灯の一部側面が赤く塗られているのは、すでに蠟燭が灯されて辺りが薄暗くなっていることを表そうとしたのかも知れない。

川岸には摘み取られた花卉が山のように重ねられているのは、いささか大げさにも思われるが、大規模な加工業者であればそんな光景も見られたのだろう。

⑥「花踏み」(花揉み)

半切桶というたらいで花卉を入れて少し水を加えて素足で踏みつける作業である。そうすれば、花卉はいよいよオレンジ色を増していく。絵巻では上半身裸になった男性がたらいの中の花卉を踏みつけ、その脇からもう一人が桶の水をたらいに入れていた様子が描かれている。もう一つのたらいでは、男性が手で花卉を揉んでいる様子である。



⑦「花振り」(水洗い)

ここでは踏みつけられて出てきた黄気汁という黄色の色素を取り除くため、再び籠に花を移して洗い流す。一般に黄気汁を洗い流すほど紅の質が良くなるといわれる。夜間に雨や露に当たるほど紅色は良く出やすいとされたので、そうでない花卉の場合は、改めて水で黄

気汁を流す手間がかかったのである。

絵巻では禪姿の男性が引川に入って籠を持っている。これから花を洗おうとしているのか、あるいはもう終わったのか。その横では女性が禪がけに前掛け姿で川の中に入っている姿がある。しかし、手を滑らせて籠を流してしまい紅花が引面に散らばっている。「しまった」という表情と慌てている手振りがおもしろい。日常に起こりがちな場面を逃さず捉え、ユーモラスに描いている。



⑧「花寝せ」

簀を敷いてその上に花卉を薄く並べる。この場面は絵巻上部に描かれた三棟続きの小屋の一番手前で行われている。並べた花卉にまんべんなく水を数回かけて一〜二日放置しておく。これは風通しのいい場所で行い日陰干しを心がける。花の様子を注意深く観察して幾度となく花卉の手返しをしなければならぬ。そうすれば花卉は次第に醗酵して変色し赤みを増してくる。寝せすぎると醗酵しすぎて「花流れ」といって失敗する。これは長年の経験と感がものをいうのである。絵巻では花卉への散水の場面は省略されている。

さらに、三棟続きの二番目の小屋の中で、三人の男性が花卉に触りながら談笑している場面がある。おそらく花卉を手返ししている様子を描こうとしたものだろう。そうであれば、この場面は一棟目の「花寝せ」の脇に描かれればもっとわかりやすかったと思われる。

ところで、「花寝せ」で使用する用具として花蒸籠というものがある。縦横一メートル位の簾に高さ十センチ弱の木枠をはめたもので、簾の上に簀を敷いてそこに花卉を薄く並べる用具である。青山永耕筆「紅花屏風」にも描かれている。しかし、この絵巻では簀の下に簾を敷いただけのもので、木枠のない簡略化された用具を使っている。木枠のないものであれば、花卉を一定程度のあつさに並べることはできなくなる。ただし、手返しが楽であり花卉に目が行き届くという効果はあったと考えられる。

⑨「花練り」

この工程は、寝せた花卉を臼に入れて杵でつくか、半切桶に入れて足で踏みつける、または手で揉む、などの作業を行う。この時また黄気汁が出るので、それも自家用の染料とすることができる。

絵巻では、一人の男性が上記三棟続きの一番目の「花寝せ」をしている小屋の片隅で、たらいに入った花卉を手でこねている。やがて紅花は粘り気が出てくるので団子状に丸める。これを花餅という。しかし、この絵巻では丸めている場面はどこにも描かれていないので、省略したと考えざるをえない。

この「花練り」の場面は、本来ならば中程の二棟目で行われている手返し場面に描かれていたほうが順序としてわかりやすい。また、三棟目の奥まった小屋にはたらいのみ置かれて人は誰もいない。薄いピンク色をした布地が上から吊られているのが見える。これは自家製の花染木綿を乾燥させているものと思われる。たらいの脇に紅染めにいそむ女性たちを描けば、そこで染め上げたものが干されているのだと納得できるはずである。



⑩ 「花並べ」

この工程は、団子状に丸められた花餅を筵に整然と並べる作業である。三棟の小屋の手前広場で、五人の男女が筵の上に坐りこの作業に取り組んでいる。母親が赤ん坊を後ろにおいて仕事に向かっているのが見える。とても忙しい様子を表そうとしているのだろう。



⑪ 「花踏み」

花餅を並べ終えたら、その上からもう一枚の筵を被せ、素足で筵の上から花餅を平均に踏みつけてせんべい状にする作業がある。この作業を「花踏み」といっている。男性一人が筵の上に立って花踏みを行っている場面はあるが、さほどの動きがないので見逃してしまうかも知れない。

⑫ 「花干し」

「花踏み」を終えたら、二枚重ねの筵をそのまま二人で持って裏返しにして上筵を取り去る。このとき筵に花餅がへばりつかないように細い叩き棒で筵の上からたたいて花餅をはがす必要がある。筵作業に従事する男性三人が手に持つ細い棒状のようなものは、この筵の叩き棒である。一人の男性がこの作業を行っている様子が描かれている。青山永耕筆「紅花屏風」でも、女性たちがこの叩き棒を使って花干し作業を行っている。

このようにして筵にせんべい状に並べられた花餅を天日に干し、これを一日数回繰り返す作業がある。この花餅返しも単純な作業ではあるが難しい面もある。つまり平均に干すことが肝要であり、さらに干し上がりすぎても色が黒ずんで失敗するから注意が必要である。

⑩⑪⑫の工程はどれも単純作業である。したがって老人・女性・子どもたちも大いに手伝って賃金を稼いだことが記録に残されている（注3）。

特に⑫「花干し」の作業は子どもたちも大いにやった仕事のように、筵一枚を並べて鑊銭五文、花餅返しは筵一枚分で同じく鑊銭五文の小遣いが得られたことが記録されている（注4）。子どもも労働の一助となっているのは、それだけこの作業が人手の問題とともに、手早く行われなければならなかったということも示しているだろう。

絵巻では、小屋の前で日当たりの良い広いスペースを確保して、筵を広げてこれらの一連の作業を行っていた。広い敷地を持つ農家の庭先でなければ不可能な仕事であることがわかる。



⑬花餅袋詰め・荷造り

乾燥した花餅を製品として袋詰めを行い、いくつかをまとめて荷造り梱包する場面である。立派な屋敷は荷主問屋の家であろうか。濡れ縁では問屋側と算盤を左手にする着流し姿の商人が話し合っている。紅花工程の最終場面から、この商人は京都商人側の人物かも知れない。製品となった花餅の品質を吟味しながら値段と出荷の交渉をしているように思われる。右側の軒先には巨大な秤が吊るされており、いかにも商人屋敷を思わせる。

左奥の部屋では天秤ばかりで量りながら花餅を袋詰め作業している人がいる。荷造りの基準として、享保年間頃は花餅の五百匁袋入れが六四袋（百二十 kg）で一駄とされていた。馬一匹の背中に載せる重さの単位として使われた。五百匁を入れた花餅袋はいくつかの単位に納めて、大きな渋紙に梱包して上方に輸送した。

梱包用の渋紙は数カ所に描かれている。中高音の人が荷物を背にしたとたん体が後ろに反ってしまい、まわりが思わず「大丈夫か」とばかり声を掛け、手を差し伸べているような場面も見られる。数十キロにまとめられた花餅は年配者にはずしりとくる重さだったろう。

ところで、茶色い渋紙の梱包用紙が屋内一個、屋外に三個描かれている。背負った梱包荷物は左右に突起状の三角がみえる。いずれも異形な姿であるのはなぜなのか疑問が残る。これが次の場面ではきおの俵状の荷物に変わっている。上からコモなどで覆いかぶせたのだろうと思われる。



⑭陸送と船積み

特産品の紅花と青苧は、馬の背中に荷物を積んで舟役所のある大石田河岸まで陸送するのが常であったといわれているが、絵巻にはそういう光景は描かれていない。絵巻は、すでに馬の背から荷物が降ろされて、船積みされようとしている場面である。渋紙の荷物はいつの間にか本格的な俵状の荷物となっており、この梱包過程は省略されている。この部分には見えない断絶がある。

さて、船積みされる場所の問題であるが、大河である最上川と大石田河岸を描いたとはとても思えない。絵巻が描かれたのが東根付近の農村ならば、島・大堀という米のみを船積みする小さな船着き場を想像させる。

あるいは、大石田河岸への途中に三難所があったとしても、すべて馬による陸送ではなく、あえて船で輸送した場合もあったのではないかな。船賃のほうが安かったという経済的事情が働いていたはずである。もし筆者が大石田河岸を描こうとすれば、最上川最大の河岸としての賑々しさ、活気ある光景をもっとリアルに描いたはずではないかと考えられる。

青山永耕筆「紅花屏風」でも、馬による輸送および最上川と大石田河岸での荷積みなどは一切描かれていない。唐突に、海に浮かぶ屋号を記した二十を超える帆船が湊に向かって進んで来る場面、そして都への荷車による搬送の場面が描かれている。

屏風はともかく、「紅花絵巻」の筆者は送り出す出荷場面をあまり重視しなかったことが考えられよう。



三、注目される描写

(1) 季節感をあらわす雲雀

工程①「畑起こし」と②「種蒔き」の場面上空に、二羽の茶色い鳥が飛んでいる。うっかりすると見逃してしまうが、明らかに春の訪れとともに現れる雲雀である。二羽はつがいであろうか。これに気づいて上空を見上げる鍬を持つ農夫もきちんと描かれている。紅花づくりの農作業の始まりが雲雀さえずる春であるという季節感を表現したのだろう。



(2) 屋号「八に十」(ヤマジユウ)

「ヤマジユウ」の屋号は、絵巻の中では二か所に記されている。工程④「花摘み」から⑤「花洗い」の間で、小屋の軒下に置かれた紅花を集荷した籠に見られる。屋号はさらに工程⑭「船積み」されようとする荷物にも、明瞭ではないがそれらしき文字が描かれている。この屋号は、絵巻を所蔵している武田家が代々使用してきたものという。とすれば、当然この絵巻は武田家の紅花作業の様子を描写したものと考えられる。しかし、この屋号を使うもう一つの名家があった。紅花商人で名高い山形十日町の佐藤利兵衛家である。両家が使用した屋号なのであり、どちらを描いたのか決め手がない。あるいは胡別の家屋号だったのか。



(3)花餅のかたち

工程⑩「花並べ」～⑫「花干し」の筵に並べられた花餅の形に注目したい。出羽山形の花餅を考えるにあたり、まず、前記した横山華山筆「紅花屏風」の武蔵国で描かれた花餅に触れたい。というのは、驚いたことにこの地方で作られる花餅は大人の頭に近い大きさに作られていたのである。これが量ほどの戸板に五個二列にして十個載せられ、屋内に運び込まれようとしている様子や、三個ぐらい並べた小さな戸板を一人の男が重そうに運んでいる様子が描かれている。だいぶ出羽山形の花餅の大きさは異なるのである。出羽山形の大きさはどうか、文献にはつぎのように書かれている（注7）。

『三才図会』や『紅花列伝』等という本によりますと、「最上の紅餅は、大きさ錢の如く、西国の紅餅は、三四寸許り」とありまして、地方によりその形も様々あったようです。『本草綱目啓蒙』という本では、この点をもっと詳しく説明し、（中略）奥州ノ物ハ形小ニシテ薄シ、コレハ弁ヲトリテ少シジツ集メ、席ノ上ニナラベテ、ソノ上ニ席ヲ蓋ヒ、オモシヲカケ、錢形ニ造ルモノナリト云ウ

以上のことから、出羽山形で作られた花餅は「錢の如く」小形のものであったことが認められる。その形は今でも伝統的なものとして続いている。

さて、つぎは花餅の大きさよりも形、姿を考えてみたい。また同じ文献を紹介したい（注8）。

村山郡長崎村の百姓代弥右衛門が御役所に提出（註一 十一月とあり、文政以前のもの）

（中略）

花の丸め方は国々により違い御座候、最上は本文の通り、米沢は手のうちにまるめ、直ちに筵へうつし申し候、会津は三角に菱麦形といたし候。

文中、「最上は本文の通り」とは、前述のように村山地方の花餅は小さい錢形ということである。さて、ここで疑問点が生じる。「紅花絵巻」に描かれた花餅の形に注目してみよう。筵に並べられた花餅のかたちは、いずれも錢形＝丸形もしくは楕円形には見えない。どう見ても三角なのである。そこで、引用した文献には「会津が三角に蕎麦形」とある。とすれば、この「紅花絵巻」が描いた場所とは、出羽山形ではなく会津なのであろうか。『会津農書』を見れば、確かに江戸時代の会津地方でも紅花が栽培されていたことは事実である（注9）。この問題をもっと比較文化史的に考察を深めていかなければ明確できないものである。本稿においては疑問点を指摘することとどめて今後の課題としたい。



(4)花染め木綿

作業工程⑦「花洗い」⑨「花練り」の段階で出る黄気汁を利用して木綿を染めたものを一般に「花染木綿」という。庶民は、黄気汁をたくみに利用して、産着や肌着などを染めたりして自家製の染色衣料を身につけている。都で商品化された高価な紅染め衣料は、庶民にとってまさに高嶺の花だったのである。紅花絵巻ではこの作業場面は描かれていないが、花染木綿を吊るして乾燥している場面が出てくる。

一方、青山永耕筆「紅花屏風」には、たらいに向かって染色作業をする女性三人と、染め上げられた布地が物干竿で乾燥されている場面が描かれている。ところが、布地はじつに鮮やかな紅染めとなっていて、どうも当時の実態とそぐわない印象がある。つまり、庶民の自家製の紅染めは、もっと地味な薄紅色や黄色が大半だったと考えられるからである。「紅花絵巻」の作者のほうで、当時の農民の実情を踏まえて描いていると思われるのである。



(5) 必死の避難作業

作業工程「花干し」の最後に当たる場面は必死な様子がよく描かれている。絵巻のなかでは最も動的に描かれているといえる。見る見るうちに上空に黒い雲が生じ、木々が大揺れして突風が襲ってきたのである。男たちは慌てて花餅が干してある六枚の筵を屋内に避難させようと二人で組んで運んでいる。雨に当たったら台無しである。着物が背中までぬれ上がって、褌をしめる尻が丸出しになっている男もいる。見かたはどうでもいい。急ぐあまり足がつかずいて転んでいる者もいて、花餅を地面に落としてしまっている。みな気が競っているのは同じで、ほかの筵からも花餅がこぼれ落ち地面には花餅がばらまかれる。それをこまめに拾おうとする男もいて悲鳴が聞こえてきそうである。

逃げ込もうとする人々が生々しく描かれていて、よくその場の雰囲気を与えている。天候と闘いながら必死の思いで花餅生産に従事していることがよく理解できる場面である。



四、描かれる人間模様

(1) キセルをくわえながらの花摘み

工程④「花摘み」では、男女十人が水田に入って仕事に励んでいる。ほぼ中央の男性はキセルをくわえて煙草をくゆらし、柔和な顔で花を摘み取っている。右脇にいる女性もいくぶん笑顔のぞかせながら同じ作業を続けている。花摘みとは、紅花の刺に当たらずに注意しながらの作業、そして露が乾かない時間帯での手際良い作業なのである。実際はキセルをくわえることはほとんどありえないだろう。これから始まる一連の紅花作業を前に、生産農家の明るさと余裕を表そうとしたものではなかろうか。



キセルをくわえながらの花摘み

(2)様々な商取引風景

工程の④「花摘み」から⑤「花洗い」までのあいだに、多くの取引にからむ図柄がある。まず、「花摘み」の左先の畦道で、生産農家の夫婦が摘んだばかりの紅花を差し出している場面がある。相手は屋号を記した笠を背にした商人の手代とおぼしき人物である。こういう人達よ、摘み取り時期に紅花の出来具合の情報をいち早く得ようと村々に入り込んでいたのだろう。この季節は農村に都市部の商人やその手代たちが入り込んで、ある種活気ある空気に満ちていたと考えられる。



紅花を商人に差し出す農夫

その左脇には、天秤棒で両肩に天秤籠を担いだ人物が描かれている。これは生産農家から直接紅花を買い集める集荷業者（サンベ）と思われる。集荷したばかりの紅花を運んでいる様子であるが、急いでいるのかゆっくりなのか、あまり動きがない。



ボディ籠をかついだ集荷業者（サンベ）

さらに左に進むと、いくつかの小屋付近では集められた紅花を秤で計って買い集める仲買業者、あるいは花屋（花餅加工業者）などとの取引場面が描かれている。サンベは疲れて路上に坐っているふうに見える。

さらに左に進むと、屋敷の中で算盤片手に帳面を開いて何やら算段している商人が描かれている。その脇では頭をかかえて困った風情の手下の顔がのぞく。紅花購入に当たり採算の面でよくよく思案している様子なのだろうか。



算盤片手の商人

一方、屋敷の外ではサンペらしき人と身なりのいい他国の業者とのやりとりのような場面がある。業者が直接交渉して現金をその場で示しているように見える。地面に散らばっているのは金銭だろうか。そのずっと左手には、地元人と思われる三人に取り囲まれ、取引交渉がまとまらずにやや困り顔に描かれた業者もいる。帳面は手元になくやや離れたところに投げ出しているようである。三人は煙草を吸ったり、手振りを交え笑顔で話しかけたりして、いずれも余裕たっぷりの表情に見える。荷造り梱包の場面でも、その近くの立派な商人屋敷の中で繰り広げられる話し合いは、京都に向けての紅花の値段の最終交渉のようにも受けとめられる。



売買交渉か



売買交渉で困り顔の商人

このような屋敷の内外に繰り広げられる取引の場面は、活気あふれる商いぶりを示すとともに、紅花の売買ルート・流通機構には直接・間接、あるいは正規外のいくつかの方法があったことを物語るものである。実際、紅花市場も山形では七日町や十日町にあって、そこで花餅の激しい売買競争が行われた。売買をめぐる駆け引き・腹の探り合いには相当のドラマがあったことを思わせる。

その他、絵巻には外部商人らしき人物が旅人姿で大福帳を携えて歩いている場面もある。「花洗い」する川の反対の岸では、栗毛の馬と白馬の脇で、作業の喧噪をよそにゆっくりキセルをくわえて煙草をくゆらしているのは、都の商人から派遣された人物なのであろうか。



紅花送り荷の最終交渉

(3) 乱闘場面

これまでみた商取引の図柄に連続するものとして展開されているのは、四人がかりむ喧嘩の場面である。この人達まつい先ほどまで、手前に敷かれた筵に陣どって酒盛りをやっていたようだ。この騒動で入れ物が倒れて中から液体が流れ出している。これはどぶろくでもあろうか。調理を手伝っていたと思われる前掛け姿の女性が、困惑して喧嘩をやめるように男どもに声をかけているふうだ。主として二人が取っ組み合い、あとの二人は仲裁にはまっているようにも見える。これは、紅花取引に関する商談のもつれを意味するのだろうか。この喧嘩を考えるカギがある。まず『名物紅の袖』をみてみよう。

紅花相場は、ほかの商品の売買と違って、短時間で値段が高下する。秤こものをいわせ、だれするともなく自然と値段の高下が決まり取引が成り立つ。

山形は都から遠く田舎町であるけれど、紅花の売買にかかわる人のようすは、丸裸だったり肌着だったり、あるいは笠みをつけてものものしいでたちの者もあり、まるで気遣いざたである。この光景を他国の人が見れば、あきれかえることだろう（注5）。

もう一つ参考資料をあげよう。

紅花市

此町へ紅花最中の時分には市場を立、京都より紅花中買下りて売買仕る、其節へ不狂人くるふと申し、前後を争い、親子の見さかいもなく買ふたり、全国ニハ無之事、アア、其時を他国の衆には見せましたいこと、紅花について諸商人の賑わい花々敷事也（注6）

以上の二つの資料からは、紅花の売買、取引時の関係者は「気遣いざた」の状況にあり、「狂人」となって前後を争ったようである。これは主に紅花市場の様子を語ったものであろうが、ほかの取引場所でも似たような状況は当然あったと考えられる。したがって、絵巻に見られる喧嘩の場面はそういう実態を踏まえて描かれたとみることができる。普段は穏やかな農村でも、この時期ばかりは活気と裏腹に殺気立った雰囲気も生まれて、些細なことからも酒の勢いで商取引に不満を持つ者が乱行に及ぶことがあったのだろう。

この乱闘場面は、じつは前記の横山華山筆「紅花屏風」にも描かれている。この屏風は、前半双が文政6年の武蔵国（埼玉県）、後半双は文政8年の奥州大河原金ヶ瀬（仙台市）からなり、それぞれの花餅づくり作業をじつに写実的に描いている。件の乱闘は前半双の武蔵国の描写に見られる。これは「紅花絵巻」に描かれたことと偶然に一致したのではなくて、この時期に各地でよく起こったことと考え

たほうがよいのだろう。



乱闘場面

(4)村を訪れる人々

絵巻には、商人や花餅づくりに従事する人たちを中心に描いているが、そればかりでなく、よく観察すると地元の人ではなくその時期に特別にやってきた人々をも描いていることに気づく。

① 魚売り行商

両肩に天秤棒を担いで魚を売りに来た、いわゆる「魚屋」を描いている。ねじり鉢巻きをして快活そうな男性が魚を売り込もうとやってきたのである。籠の中には鯛のような赤みの魚も入っている。『名物紅の袖』には、山形は「仙台方面の海から毎日魚が持ち込まれる」とあるので、この魚売りも仙台から来た人を描いたのかも知れない（注10）。村山地方は仙台からは笹谷峠ばかりでなく、二口峠や関山峠を越えればそれほど遠くない位置にあった。

紅花のある農村に行商が来るということは、この時期に紅花を求めた他国から往来する客もあり、紅花売買により現金が動くことをよく承知していたからにほかならない。

もう一人、しばらく左に離れたところに串刺しにした小魚を右手に持っている男性も見える。笠に背荷物、そして脚絆の姿は遠路やってきたことを思わせる。主として川魚を捕まえて売る行商人であるようだ。いわゆる本格的な「魚屋」ではなくとも商売が成り立ったのがこの時期の農村だと思われる。

なお、青山永耕筆「紅花屏風」では、花干し作業に忙しい農家の庭先に魚売り行商人が来ていて、子どもが大人にねだっている場面も描かれている。



② 天秤棒を担ぐ女性

工程⑤「花洗い」の場面で、紅花の花弁が山と積まれているその後方に、女性が両肩に天秤棒を吊るして桶を担いでいる様子が描かれている。桶には水が入っているのであろうか。この女性は頭に白布を掛けた「燈籠びん」と見える髪型で、紋付の着物を着用した身なりの一婦人である。周囲の前掛け姿や胸をはだけた女性の姿とは明らかに異なり、けっして地元の人物とは思えない。三味線を鳴らす技芸を身につけた人であろうか。

そんな女性が、下衣の赤色の単衣が見えるほど裾をまくり上げ、裸や禪姿の男性と一緒に仕事に従事している。なにやらとりすました顔で担いでいる。この時期、この種の人たちも農村を行き来して花餅作業に加わることがあったことを物語るものだ。気ぜわしく労働に励む人達に遭遇して、つい安請け合いで手助けしてしまったか。あるいは、紅花売買で動くお金を当て込んでの労働だったのか。いずれにしてもこのような女性がともに労働する風情が当時の農村にあったことを確認したい。



③盲目の旅芸人

工程⑩「花干し」の場面後方に、女性を従えた男性が杖をつき、三味線らしき弦楽器を懐に抱いてたたずんでいる。二人は目が不自由らしい。どうやら盲目の旅芸人のようだ。そこに男性が近づいて声をかけている。両手で数字を表す指をたてているのがはっきりとわかる。いくら払えばいいのか芸の値段を聞いているようだ。「忙中閑あり」だろうか、需要はこのようにあった。これも前記②に表れた紅花時期の農村事情を反映したものであろう。



④物乞いする人

工程⑩「花干し」で、筵が敷かれてそこで花餅を干す作業で忙しく動き回る人々のあいだに、一人の女性が地べたに座り込んでいる姿がある。頭には手拭を被り、ゴザや用具、小物のようなものを背負っている。農作業用の背中あてらしきものも見える。衣類からはみすぼらしさは感じられないのだが、手には少し大きめの容器を持って差し出しているかに見える。よくよく見れば物乞いと思われる。大人は誰も相手にするそぶりは見せない。それでも、少し離れたところから子どもがこの人を指差しながら見つめ、そばにいる母親も同じ方向に顔を向けている。紅花の賑わいに惹かれて、幾ばくかの期待を込めて他村からやって来た人のような顔でもある。多忙のなかでも情けをかける目がこの村にわずかながらあるとしたら、それは救いのような気がする。



(5)その他、種々の姿

その他に図柄として次のようなものがあり、ほぼ単独で描かれている。

大型の鮭のような魚を背中いっぱい背負って、杖をついて集落に向かって畦道を歩いている男性。物干棹に洗濯物を干そう（あるいは棹からはずそう）としている老婆とそれを手伝う子ども。ドウと釣り針を持って路上を歩いている男性。男性二人となにやら話し合っている背の低い老婆。これらのものは何を表そうとしたのかはよくわからない。紅花とは必ずしもかわらない日常生活のある平凡な暮らしの側面を描いたものに違いない。



五、まとめ—作者の意図するもの

「紅花絵巻」は、基本的には紅花を加工して商品として出荷するまでの作業を描いたものである。作者は何を目的にこれを描こうとしたのだろうか。紅花の作業工程を後世に記録として残そうというねらいだったのか。この絵画を芸術作品として世に示そうとしたのだろうか。

どうもそれだけではなさそうである。「紅花絵巻」には、農村の人々のかみかいしく働く姿が映し出されていた。その一方で、紅花の高い経済性ゆえに寄り集まる人々の存在、取り引きをめぐるかけ引き、売買のしこりからくるいさかみ、なども漏らさず克明に描いていた。このような、さまざまな利害が交錯する場所における人間模様を赤裸々に描こうとしたと思われる。作者はそういう生々しいありのままの農村の実態を伝えようとしたと考えられる。

「紅花絵巻」がより記録性に重きを置いて描こうとしたならば、作業工程をたんとと描けばいい。あるいは、芸術性を追求するならば、どろどろした人間描写は捨象されてもいいはずである。「紅花絵巻」は必ずしも芸術性を意識して描かれた作品ではないと、考えた方が作者の意図がつかめる。落款がないのは、そういう作者の描写態度とつながっていると考えられるのである。

作者が描いてみせたのは、普段静かな農村が見せる紅花をめぐるもう一つの実体的姿であった。それが江戸中期以降積み重ねてきた出羽山形の歴史的現実だったと考えられる。その結果として今日の山形の歴史文化がある。そう考えれば、このような絵画資料をつうじて紅花とかわる人々や農村の実情をさまざま角度から見つめ直すべき価値は、いまだあると考えられる。

おわりに

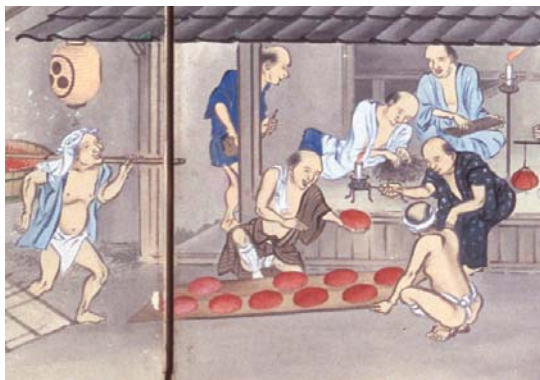
本稿をまとめるきっかけとなったのは、平成十八年三月十一日に開かれた山形県民芸協会主催の講演であった。与えられた演目は「紅花絵巻考」であったが、私にとって絵画的考察はかなわず、民俗的な観点からなんとかお役目を果たした。このたび本稿を起こしたのは、そ

の時の残務感をもとに、改めて生活文化史的視点から分析・考察を試みてみたいと思ったことによる。まだまだ不明な点が残っているが今後の課題としたい。これをきっかけに、武田家蔵の「紅花絵巻」に対する歴史・民俗・絵画史等の本格的な研究の手が加えられることを願っている。本稿おまんの手始めとなれば幸いである。

最後となったが、快く紅花絵巻の写真撮影をお許し下さり、調査にご協力をいただいた武田陽氏に深く感謝を申し上げます。

<注>

1. 今田信一『べにばな閑話』高陽堂書店 一九八〇年
2. 後藤小平次『名物紅の袖』享保十五年（『日本農業全集』45 特産1 農産漁村文化協会 一九九三年 所収）
3. 前掲『名物紅の袖』
4. 玉井茂『山形名所案内松の木枕』松の木枕刊行会 一九八四年
5. 前掲『名物紅の袖』
6. 前掲『山形名所案内松の木枕』
7. 今田信一『最上紅花史放談十話』
8. 同 上
9. 『会津農書』
10. 前掲『名物紅の袖』



参考：横山華山筆「紅花屏風」にみる花餅の大きさと乱闘場面